

ナラティブが生成される重層的コンテキストとその解釈

一次なるナラティブ・ベイスト・インクワイアリーに向けてー

莊 島 幸 子

はじめに

ナラティブ、語り、ストーリー、物語、自伝、個人誌といった、人々によって語られ、記録された資料が人々の経験を知るのに決定的に重要であるということが、学問領域を横断して声高に叫ばれるようになって久しい。これまで、社会科学におけるナラティブ・ベイスト・インクワイアリー (Narrative Based Inquiry: ナラティブに基づく探求) は、現象に関する認識論的、イデオロギー的、存在論的に幅広い理解のもとに実践されてきた。

しかし、ナラティブ・ベイスト・インクワイアリーは、ナラティブの探求のすべてが経験についての研究であることに同意を示しているものの、ナラティブの研究にいたっては、ナラティブの扱い方やナラティブ概念にかなりの違いがみられる (Clandinin, 2006; Atkinson & Delamont, 2006)。例えば、ナラティブの探求によって「生きられた経験」が抽出可能であるかどうかを巡って、「(経験ではなく) 生きられたテキスト性 (textuality) ^{注1)}」の検討にとどまるという主張 (Denzin, 1995, p.9) に対し、「テキスト性は、経験についての重要な機能、特性であり、経験が語られ、生きられた現象として研究されうる」(Elbaz-Luwisch, 2005) と考える立場もある。Riessman (1991) は、ナラティブの探求行為そのものが、コンテキストから引き離された要素還元主義に陥る危険性を指摘しており、ナラティブ研究は混迷を極めている。

では、我々は、ナラティブ・ベイスト・インクワイアリーの遂行者として、いかに実践していくことができるだろうか。本稿では、まず、ナラティブアナリシスの類型化から、ナラティブアナリシスにおいてナラティブが生成される重層的なコンテキストに着目し、4つのコンテキストを提示する。考察では、ナラティブ・ベイスト・インクワイアリーの新たな研究実践を提案する。

1. ナラティブとはなにか

「ナラティブとは何か」という問いに対しては、研究者間でも定義が一致しておらず、しばし学問的ディシプリンとのつながりの中で、多くの理論的立場が存在する (Riessman, 1991; Langelliar, 1989)。また、ナラティブは、方法論的にも多様である (Mishler, 1995)。ナラティブは調査の対象であり (Riesmann, 1993)、かつ世界を認識するパラダイムでもあり (Tokumanion & Rennie, 1992)、多面的側面を持つことが立場の多様性を生み出している (Schiff, 2006)。

ナラティブという用語が意味するものにも違いがある (Clandinin, 2006)。社会史や文化人類

学の領域では、ナラティヴとは、インタビューや観察、資料が織り合わさった全体的なライフストーリーのことを指すが、社会言語学のなかでトピックとなるのは、1つの質問に対する1つの回答からなるディスコースという個別的な単位であり、これらもナラティヴに含まれる。心理学や社会学では、個人的なナラティヴは、会話の長い区分 (long section of talk) とされる。それは、あるコンテキストにおける生 (life) に関する説明・陳述 (accounts) である。つまり、ナラティヴという広大な網の目を通して、全ての生 (life) が生きられるという比較的マクロな立場もあれば、ある出来事間のミクロな因果的連関に焦点を当てる立場もある (Riessman, 1993, p.17)。

ナラティヴに対して異なる認識を持つ研究者たちによって、いくつかの問い—ナラティヴとは何か？ ナラティヴは特徴的な構造を持つのか？ ナラティヴには異なるジャンルはあるのか？ いつそれは語られ、何のために語られるのか？ 誰に語る権利があるのか？ 文化的、心理学的、社会的な効果は何か？—に回答が与えられてきた。次節では、Mishler (1995) のナラティヴアナリシスのモデルを参考にして、これまでナラティヴが探求されてきた観点についてまとめる。

2 ナラティヴアナリシスのモデル (Mishler, 1995) による類型的レビュー

表1は、Mishler (1995) によるナラティヴアナリシスのモデルの類型化であり、大きく3つのカテゴリー1. 参照と時間的順序: 「語ること」と「語られるもの」 (Reference and temporal order: The "telling" and the "told")、2. テキストの一貫性と構造: ナラティヴストラテジー (Textual coherence and structure: Narrative strategies)、3. ナラティヴの機能: コンテキストと結果 (Narrative functions: Contexts and consequences) —に分類されている。(p.90, Table1)。社会科学におけるナラティヴ・ターンの多様性がよく示されており、我々が世界を語り、様々なコンテキストにおいて物語を語り直しながら、出来事や経験の意味を作り出しているという認識を広く跡付けている (Mishler, 1995)。本稿の主題であるナラティヴを取り巻く重層的なコンテキストの検討にあたって、Mishlerの類型論は次の2点において有用と思われた。1点目は、さまざまなナラティヴアナリシスのモデルが前提としている仮定、概念、方法を比較するための枠組みを理論的に発展させることを目的として、諸研究から帰納的に類型されており、分類のクオリティが非常に高いことが挙げられる。2点目は、ナラティヴが社会的に状況づけられる (socially situated) ことや、ナラティヴの政治的コンテキストを取り込んだ議論を行っており、ナラティヴ研究におけるコンテキストの問題を積極的に押し出していこうとする姿勢がみられる点である。

表1 Models of Narrative Analysis (Mishler, 1995, p.90, Table1から内容を引用)。

カテゴリー 1 Reference and temporal order: The "telling" and the "told" (参照と時間的順序: 「語ること」と「語られたもの」)
下位項目 1. Recapitulating the told in the telling (語りから語られたものを概括すること) 2. Reconstructing the told from the telling (語りから語られたものを再構成すること) 3. Imposing a told on the telling (語られたものを語りに押し付けること) 4. Making a telling from the told (語られたものから語りをつくりだすこと)

カテゴリ 2 Textual coherence and structure: Narrative strategies (テキストの一貫性と構造：ナラティヴストラテジー)
下位項目 1. Textual poetics: Figuration, tropes, and style (テキストの詩学：配置、比喩、形式) 2. Discourse linguistics: Oral narratives (ディスコース言語学：オーラルナラティヴ)
カテゴリ 3 Narrative functions: Contexts and consequences (ナラティヴの機能：コンテキストと結果)
下位項目 1. Narrativization of experience: Cognition, memory, self. (経験の物語化：認知、記憶、自己) 2. Narrative and culture: Myths, rituals, performance (ナラティヴと文化：神話、儀式、パフォーマンス) 3. Storytelling in interactional and institutional contexts (制度的コンテキスト及び相互作用におけるストーリーテリング) 4. The politics of narrative: Power, conflict, and resistance (ナラティヴの政治学：権力、葛藤、抵抗)

カテゴリ 1. 参照と時間的順序：「語ること」と「語られるもの」は、4つの下位項目からなる。ここでは、ナラティヴは、時間的に順序立てられた一連の出来事の表象であり、現実世界における出来事のシークエンスと、ナラティヴとして表象された語りにみられる出来事の順序立ては同等のものとして扱われる。また、このアナリシスモデルを用いてナラティヴの構造的アプローチを行った社会言語学者のLabov & Waletzky (1967) は、ナラティヴを定義するのは文節間の関係の特性であると述べている。つまり、語りは過去の経験を把握する方法であり、言語がリアリティを表象すると措定したのである(桜井, 2002)。Labovらの構造的アプローチのほか、オーラルヒストリーや歴史家、ジャーナリストらが行うライフヒストリー (life history) や臨床的インタビュー (clinical interview) では、基本的に言語と現実の一致が仮定されている(Mishler, 1995)。

しかし、後にLabov (1982) は、語り手との社会的ステイタスを含んだ関係を仲介して、ナラティヴが提示されることに着目し、要求と応答というやりとりを言語的社会行為として分析することに焦点を移行している。Labovの言語的社会行為としてのナラティヴという概念を援用し、Mishler (1992) は、家具作り職人のワークヒストリー (work history) から、語り手と聞き手の双方が経験の再構成や意味の生成に積極的に関与していることを見出した。そこでは、必ずしもナラティヴが正確に過去の出来事を示すのではなく、調査者とのインタビューという固有のコンテキストにおいて、ある1つのバージョンの物語が作られるにすぎないという見解を打ち出している。

カテゴリ 2. テキストの一貫性と構造：ナラティヴストラテジーは、2つの下位項目からなる。カテゴリ 1 との根本的な違いは、ナラティヴディスコースが、実際の出来事の時間性をさほど重視しない点である。このアナリシスモデルは、もともとは構造主義及びポスト構造主義によるリテラリー分析や文法理論 (theories of grammar) に始まり、ナラティヴが異なる言語リソースを運用し、いかに構成され系統立てられながら、意味を作り出しているかということに関心を持つ (Murray, 2003)。社会言語学以降、言語の統語構造から下位項目にみられる会話やテキストへと分析単位が広がり、ディスコース (discourse) という概念が提案された。ディスコースの定義もまた、研究者間によって異なり、1つに定めることは困難である (Jaworski &

Coupland, 1999)。簡潔な定義として、中村（2001）は、①文より大きな単位の相互行為、②社会的実践と定義づけを行っている（以下では、特に①の意味でのディスコースにフォーカスする）。

歴史を物語として捉え直したWhite（1989）は、ナラティブを「言説的戦術（discursive tactic）」とみなしている。また、Kellner（1989）も、歴史の陳述は、出来事の客観的な配列からまとまりと一貫性を持つのではなく、文化的に根付いたレトリックと言語的な慣習によるものだと主張する。

語られたディスコースを分析する場合には、発話と発話の関係や全体の構造に着目することに重点がおかれ、異文化や相互行為的なコンテキストといった、実際の言語使用上の場面における発話の伝達機能が検討される。ナラティブの形式や構造と、そこから生み出される意味を切り離すことは不可能であり、それは「あのとき、あそこで」という過去のナラティブと、「今、ここ」でナラティブを再構成しつつある視点の結節点を生み出している。

カテゴリ 3. ナラティブの機能：コンテキストと結果は、4つの下位項目からなる。ナラティブが生成される場でのナラティブの機能性、作用について焦点が当てられる。自己、文化、社会的プロセス、制度など多様な局面において分析されるテーマである。

これまで多くの心理学者が、構成された個人的ナラティブを自己やアイデンティティの発達の中心に位置づけてきた（Sarbin, 1986; Polkinghorne, 1988, 1991; Cohler, 1982）。一方で、語り直し（retelling）による個人のナラティブの変化に重きを置く立場もある。Mishler（1995）は、精神分析（Shafer, 1980; Spence, 1982）や家族療法（White & Epston, 1990）が、臨床実践の1つに経験の語り直しを含むことを指摘する。ここでのナラティブとは、自己にまつわる多様で慣習的なストーリーラインを有し、人は「生（life）の語り直し」によって変化するとみなされる。つまり、ナラティブが脱文脈化された状況で、自己やアイデンティティの発達が生じるのではなく、それは何らかのコンテキスト下で、自己のある局面を語るという行為によって変化、発達していくことを意味する。認知や学習、記憶という分野でも、ナラティブが果たす機能について研究が盛んになされているが、その場合、ナラティブの機能に特化して記述するのではなく、家族というコンテキストのなかで、多様なバリエーションをもった子どものナラティブ機能が発生、変化、発達していく様子を描く必要があるということを示唆している。

家族という場から、語り手と聞き手というミクロな相互作用の単位へコンテキストを移行すると、ディスコース分析に近接する（ここでは、会話、インタビュー、臨床実践といった場面で語ることがもつ相互作用的、制度的機能に焦点がおかれる。例えば、暗黙知について理論化したPolanyi, 1985、語りとジェンダーの関係については、Fishman, 1983; Eckert & McConnell-Ginet, 2003、語りとアイデンティティの関係については、Taylor, 2006）。

ナラティブアナリシスのモデルを概観すると、3つのカテゴリのうち、どのカテゴリをとっても、ナラティブが様々なコンテキストとの関係で捉え返されていることが明らかである。ナラティブが、局所的に引き出され（locally occasioned）、語り手と聞き手による制約のなかで意味が共同的に達成されるという指摘は、ナラティブ・ターン以降の社会科学や文化における知が、現象から単に鏡像的に見出されることの不可能性を唱えている（Atkinson & Silverman, 1997）。近年のナラティブ心理学は、豊かなコンテキスト上で表現された行為としてナラティブを扱う研究領域となりつつあるが（Schiff, 2006）、研究者の多くは、ナラティブを状況的な出来事

(situated events) というよりもディスコースから分離したまとまりとして扱いがちである (Riessman, 1991)。例えば、病いの物語り (Kleinman, 1988) や、ライフストーリー (McAdams & Ochsberg, 1988)、自己物語 (Gergen, 1994)・個人的神話 (personal myth: May, 1975) といった自己に関するナラティブ・ベイスト・インクワイアリーは増大しているものの、具体的な状況下でいかにナラティブが生成され、機能するのかということはあまり検討されていないし、それらを実証するための細かな手順も吟味されていない (Riessman, 1991)。多様なコンテキストで生成されるナラティブを我々はいかに扱うべきなのだろうか？この大きな問いへのステップとして、次節では、ナラティブが生成されるコンテキストについて検討する。

3 ナラティブを取り巻く4つのコンテキスト

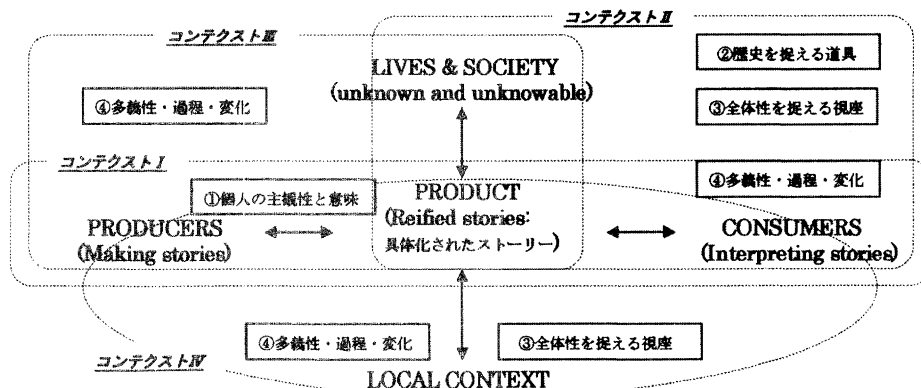
やまだ (2007) は、ナラティブが多重の文脈のなかで生成される相互行為であることを前提に、ナラティブのレベルを1. 実在レベル、2. 相互行為レベル、3. テキスト・レベル、4. モデル・レベルの4つに分類し、異なるナラティブ・レベル間の対話を明確にしている。やまだは、コンテキストからはなれたテキストに焦点化して、テキストが多様なナラティブ・レベルを超えてむすびつける働きをするとして、テキストによるレベル間対話を目指している。本節では、多重のコンテキストに埋め込まれたナラティブの様態を把握することを目的として、ナラティブを取り巻く4つのコンテキスト—I. ナラティブの相互行為的側面、II. ナラティブの社会行為的側面、社会的歴史的連結点、III. ナラティブの外側と語り得ないもの、IV. 語り手の生 (life) を取り巻く複数の生 (life)、声—について検討する。検討に進む前に、論を分かりやすく進めるために、Plummer (2001) を手がかりにして作成された図1について説明する。

ライフストーリーの理解を理論的に追求してきた社会学者のPlummer (2001) は、ナラティブを取り巻くコンテキストをメタナラティブと称している (p.44, Figure2.1)。ナラティブとコンテキストの関連を考える上で、Plummer (2001) が挙げるライフストーリー研究の特徴—①個人の主観性と意味、②歴史を捉える道具、③多義性 (ambiguity)・過程・変化、④全体性を捉える視座—は、示唆に富んだ視点である。本稿では、Plummerによって作成されたメタナラティブの図を基本形とし、これら4つの視点を組み合わせ、ナラティブを取り巻く4つのコンテキストに関する図1を作成した。以下、コンテキストI～IVについて順に検討する。

3-1 コンテキストI：ナラティブの相互行為的側面

3-1及び3-2で述べられるコンテキストIとIIは、ナラティブが社会的コンテキスト上で循環する流れの只中に生成されることに強調点が置かれている (図1中、PRODUCERS、PRODUCT、CONSUMERSを横断している)。コンテキストIは、語りが引き出される場や他者との関係のようなコンテキストIIと比較して、ミクロな領域を扱っている。社会科学におけるナラティブ・ターンとはほぼ時期を同じくして、言語学では、ディスコース・ターンやパフォーマンス・ターンが展開し、言語の相互行為的次元に目が向けられ始めた。それに伴い、ひとまとまりの言語が持つ意味や機能は、固定的でも不変でもなく、ある状況下での用いられ方によって変化し、多義的な意味を持つとみなされるようになった。ジェンダー学や女性学 (また、ゲイ&レズビアン研究や、人種研究などカルチュラルスタディーズ一般がここには含まれる) は、それま

図1 ナラティブを取り巻く4つのコンテキスト (Plummer, 2001, p.44, Figure2.1を一部改変)



で個人が内的に「持っている」とされた「女性らしさ」「男性らしさ」が、実は、自明に「存在」するのではなく、特定の状況下—公共のトイレにいくという素朴な行為が行われる状況でも—において行為され、構築されるものと考え、それを"do gender" "gender performance"と行為の側面を強調して呼んでいる（例えば、Butler, 1990; Goffman, 1977）。

このような言語に関する思考形式の変化は、ナラティブを相互行為として捉えようとする思考とパラレルである。シンボリック相互作用論の立場に立つPlummerも、ストーリーを共同行為 (joint action) とみなしている。ナラティブが自己の構成と深く関わっていることは、すでに述べたとおりだが、コンテキストIでは、ある状況下で個人がナラティブというリソースを用いながら、いかなる自己を提示し、達成しようとしているのかという、自他に対するパフォーマンスをミクロに分析していく手法が採られる。当然、人は、多様な局面で様々な自己を提示する。新たなナラティブを語ったり、昔からのナラティブを語り直したりするなかで、自己は変化、発達していく。そのような多義的で可変的な様態は、孤立した個 (individuality) ではなく、常にあるコンテキスト下で、なんらかの他者（実在するか否かは問わない）とともにある主体 (subjectivity) としての自己を映し出すだろう (Sclater, 2003)。

エスノメソドロジーの手法によって、日常生活における相互行為がいかに意味を産出しているかが明らかにされているが、1つの状況として、筋 (plot) の展開を伴う対人間的ドラマであるインタビュー (Holstein & Gubrium, 1991) のコンテキストもみていく必要がある。それはまた、聞き手が語り手に対していかなる自己を提示しているのかについて、反省的に描き出す行為である。

3-2 コンテキストII：ナラティブの社会行為的側面、社会的歴史的連結点

コンテキストIIは、社会的コンテキストに埋め込まれた社会的行為としてのナラティブに関心をもつが、この点はPlummer (1995) および小林 (1997) に詳しい。Plummerは、主に人々のセクシュアル・ストーリーを取り上げ、それまで私的な領域でしか語られず、聞かれることのなかった個人的経験のナラティブが、公的な領域で聞かれるようになった社会的条件を解明した。そして、ある社会的枠組みやコンテキストが、彼らの語りを引き出すストーリーテリングの過程と、逆に、彼らの語りが社会に対して孕む政治性について考察を試みている。ナラティブとは、

語る場と聞かれる場を持って生成されるのであり、そのタイミングとは、コンテキストⅡを鑑みれば、歴史的な時間の問題でもあり、政治的な過程のなかにもあるといえる（小林, 1999）。図1では、コンテキストⅡは、PRODUCT、LIVES & SOCIETY、CONSUMERSを囲っている。

「彼／彼女の問題は公的な問題となる（公的問題は、常に歴史的で構造的である）」というDenzinの言葉（1992, p.15）もまた、個人のナラティブが「公」という社会的にマクロなコンテキスト・コミュニティ（年齢、階級、ジェンダー、性的指向にしたがって構造化された、歴史的に発展する「記憶の共同体」ともいえる）と常に連結していることを意味している。そのようなコミュニティには、社会的規範やイデオロギーを具現するマスター（モデル）・ナラティブがある（桜井, 2002）。人々によって語り出されるナラティブは、マスターナラティブの変化、歴史の変遷といった社会的コンテキストと切っても切り離せない関係にあるだけでなく、さらに個人のナラティブが社会的なコンテキストを変革する可能性を常に秘めている。しかし、ナラティブを語り出せないコンテキストはいくらでも存在しうるし、ナラティブを生成することで他の可能性が閉じられる場合もある。我々は、ここで述べた意味での社会行為的側面や、社会的歴史的な結節点としてのコンテキストも分析の射程に入れ、より包括的に人の語りや経験をみていく必要があるだろう。

3-3 コンテキストⅢ：ナラティブの外側（混乱・多義性・矛盾）と語り得ないもの

コンテキストⅢでは、「ナラティブは、経験に意味を与えるだけでなく、我々がそれを通してまさに自己（selves）が構成される。そして我々が語る物語を我々は生きている」というナラティブの機能に対して、「ディスコースの外側は何か what is outside discourse?」（Frosh, 1999）という次元について検討する。本稿では、「外側」が意味するものは、「ナラティブを越えたところ」を指すのではなく、ナラティブの混乱・多義性・矛盾や語り得ないものとして扱う（荘島, 2007a）。図1では、コンテキストⅢは、LIVES & SOCIETYとPRODUCERSをまたがっている。つまり、個人の体験が経験として語られる過程において、ナラティブは多義性や語り得ないものを孕むのである。「自分の人生を話すとき、人々はときどき嘘をつき、いろいろ忘れ、誇張し、混乱し、勘違いをする。だが、それらは複数の真実を明らかにしている。（中略）私たちは、それらの創作をつくりあげるコンテキストやそれらを伝える世界観に慎重な注意をはらいながら、解釈を通してのみそれらを理解する」（Personal Narrative Group, 1989, p.261）ことしかできないのである。

浅野（2001）は、自己物語と語り得ないものについて理論化し、語り得なさがどのような時に、どのような形式で現れるのか述べている。荘島（2007a）は、語り得ないものの表象様式の検討から、具体的な事例の分析に際し、①表象不可能な真実からの示唆としての＜飼い馴らされずにいる声＞、②出来事を見通す統一的な＜モダニズムの文体＞、③精神分析における＜仮構の物語＞の介在という3つの視点を設定し、ある性同一性障害の事例を検討している。また、ナラティブが生成される場は、ナラティブが抑制される場でもある。ナラティブが語り手と聞き手の相互行為、共同作業において生成される以上、語り手が語りを語り得ないと解釈することは、聞き手が何を聞きだそうとしているのかということに深く関わっている（桜井, 2001）。したがって、語りが混乱を起こしているように聞き手に感じられた場面があれば、その場面のコンテキストを詳細に分析し、研究者自身がインタビューに対して無意識に抱いている構えについても内省

する必要がある。コンテキストⅢの分析は、複数の真実や声、経験の在り方を重層的に映し出すだろう。

3-4 コンテキストⅣ：語り手の生（life）を取り巻く複数の生（life）、声

コンテキストⅣは、個人のナラティブを、複数の他者のナラティブとの関連からみる。人がある出来事について、自己の経験として意味をもったあるナラティブを生成するとき、その出来事の時空間を共にした他者はその出来事をいかに語るのかといった問題を扱うコンテキストである。図1中、コンテキストⅣは、PRODUCERS、PRODUCT、CONSUMERSがLOCAL CONTEXTと相互作用している場面を指す。

例えば、Riessman（1990）の離婚についてのナラティブ分析は、女性側と男性側で彼らの関係の在り方について異なるリアリティの構築を行っていたことを明らかにしている。また、Polkinghorne（1991）は、黒澤監督による映画「羅生門」を例にして、ある出来事や体験に対して、1つ以上のナラティブの筋（plot）があると、ナラティブに、より意味のある布置（constellation）や統合が見込まれると述べている。そして、ある筋とは異なる別の筋が出来事を再解釈することで、出来事の意味に変化が生じるという。（日常の些細な出来事であっても、災害や病いといった転機となりうる出来事であったとしても）個人にとっての経験は、他者から孤立して生み出されるナラティブはなく、コンテキストⅠ、Ⅱで触れたように、必ずや他者や社会を仲介して生成される。そして、異なる筋によって語られた他者のナラティブを目の前にして、人はまた新たなナラティブを語り出す契機へと開かれている。ナラティブとは本質的に対話的な機能を備えた過程であり、ある公／私的な場とは、複数のナラティブが存在する多声的な場である（Bakhtin, 1974）。それぞれの声は、互いに融合することなく、異質なずれによって対話的に生成される（コンテキストⅢで述べたナラティブの矛盾や多義性に関していえば、一見単声にみえる自己の内部でも対話の過程が生じているといえ、その過程にもずれが発生していることが明らかにされている）

家族という集団を例に挙げてみよう。家族とは私的でクローズドな社会集団の典型例であるが、これまで、家族の経験は、態度や行動などの個別的で断片的な変数としか扱われてこなかった（Daly, 1992）。しかし、ナラティブアプローチは、家族の相互作用やダイナミクス、家族メンバー間の対話的なコンテキストに迫ることを可能にする。家族の経験を、複数のパースペクティブから眺めることで、いかに「リアリティ」が構成されている（されつつある）のか、そもそもいかにして1つの「リアリティ」の構成に家族メンバーが寄与しているのか、また、いかにそれが変化している（してきた）のかを、人生という長い時間の経過に沿って詳細に分析することができる。

4 考察

いまやナラティブ・ベイスト・インクワイアリーは、諸々の領域をまたがり、質的研究の主要な研究（方法）として確立しつつある。しかし、ナラティブの定義が錯綜しているのと同様に、ナラティブ・ベイスト・インクワイアリーにおいても様々な研究が乱立している。本稿では、ナラティブアナリシスのモデルのレビューから、研究及び実践においてナラティブを扱う方法として、ナラティブが生成されるコンテキストの重要性に改めて着目し、Ⅰ．ナラティブの相互行為

的側面、Ⅱ. ナラティブの社会行為的側面、社会的歴史的連結点、Ⅲ. ナラティブの外側と語り得ないもの、Ⅳ. 語り手の生 (life) を取り巻く複数の生 (life)、声という4つのコンテクストを検討した。今後の課題としては、これらのコンテクストをナラティブと切り離さない形で研究へと結び付けていくことが求められている。重層的なコンテクストに埋め込まれたナラティブを研究するスタイルは、事実の記述、経験や意味の単なる映しといった、むしろ実証主義的なナラティブ・ベイス・インクワイアリーとは異なる新しい研究の視点をつくりだすだろう。

例えば、Mishler (2005) は、ナラティブアナリシスモデルの3カテゴリを組み合わせた研究を推奨している。ディスコース分析中心の研究でも、ナラティブの構造や機能についても分析をするといった具合である。考察では、重層的なコンテクストで生成されるナラティブをいかに研究として扱っていくのかという問いに対し、過渡的空間としてナラティブを記述する研究実践について提案する。現時点で考える研究実践について、①ミクロ過程：ナラティブに現れる自己の問題、及び②マクロ過程：多様かつ重層的なコンテクストを組み合わせた研究、という2つの視点から筆者の考えを述べる。

4-1 ミクロ過程：ナラティブに現れる自己の問題

ナラティブ・ターン以降、立場によって違いはあれ、ナラティブやストーリーと自己、アイデンティティのつながりの在り様が明らかにされてきている。では、重層的なコンテクスト上に現れる自己は、いかなる状態で存在しうるのだろうか？ Sclater (2003) は、自己をナラティブや言説によって輪郭を縁取られる歴史的、社会的、間主観的な構成物であることに同意を示しながら、ナラティブの実践やパフォーマンスに焦点を置くことは、自己が常にナラティブで語られるもの以上である可能性を示唆していると述べている。そして、研究において着目する対象を自己、アイデンティティから関係性 (relationships) 概念へと移行を図っている (関係性概念には、現実 (real) と想像 (imagined)、あるもの (present) とないもの (absent)、無意識の次元も含まれる)。

関係性概念は、ナラティブが生成される重層的なコンテクスト上で輻輳的に移行する自己のポジショニング (positioning：直訳は位置調整。例えば、Bamberg, 2004) の概念と親和性がある。例えば、ポジショニングの分析では、「私」の関係性概念として、ナラティブを生成する「私」、ナラティブのなかで指示される「私」、「私」を指示する「私」、登場人物としての「私」などが存在する。しかし、明らかにされるべき「私」は1つに統一されていないため、個人的なナラティブを字面の通りに分析しても、個の理解に達することはできないという (Sclater, 2003)。では、重層的なコンテクスト上でずれを孕んだ「私」は、どのように理解されるのだろうか？

Sclater (1998) は、Winnicottの過渡的現象の理論 (transitional phenomena：この現象のなかで、自己が生成され、他者との関係が変容していくとする理論) を援用し、ナラティブを過渡的空間 (transitional space) としている。過渡的空間においては、「私」は、内在物でも外在物でもなく、また、交流から生み出されたものでもなく、常に何かになろうとする (becoming) 心理社会的なアイデンティティワーク (identity work) の過程であるという。「私」にとっての過渡的な空間を構築するという意味で、ナラティブは「私」の生成と維持、そして変容に重要な役割を果たしている。自己の構造について、アイデンティティの多面性 (a multifaced phenomenon) に言及することは、ごく普通のこととなってきたが、さらにその多面的自己のダ

イナミックな過程や自己の可能性（例えば、潜在的自己）に関心が向けられ始めている（Hermans, 2006）。例えば、Gregg（1999）は、自由形式のインタビューデータを分析し、自己の矛盾した「表層的」ディスコース間にあるアイデンティティの連続的移動に焦点を当てたモデルを提起した。莊島（印刷中）は、「私は性同一性障害者である」と語っていた者が、次第に「私は性同一性障害者ではない」と自己について語るようになっていった過程を自己物語の再組織化過程として分析し、ナラティヴの変容から常に何か別の者に移行していこうとする自己の在り様を検討した。これらの研究は、過渡的空間としてのナラティヴと、その空間で生成、維持、変容する自己との関連を示唆する具体的研究といえる。

Atkinson & Delamont（2006）が、質的研究が人々の経験を描き出すことに固執すべきではないと警告したように、ナラティヴそれ自体は経験をそのまま映し出すものではなく、何かに変わりゆく過程の一場面を切り取ったにすぎない。描かれるのは、ナラティヴの過程・多義性・変化（Plummer, 2001）であり、それは常に重層的なコンテキストに埋め込まれているのである。

次に、マクロな観点から、重層的なコンテキストを組み合わせた研究の方向性について展望を試みる。

4-2 マクロ過程：重層的なコンテキストを組み合わせた研究実践

ここでは、研究という行為を、過渡的空間としてのナラティヴ実践と捉え直してみよう（研究を行い、知見を出すこと自体が研究者による1つのナラティヴ実践である）。つまり、研究というナラティヴ実践は、過渡的空間を常に生成し続ける営みであり、翻って、過渡的空間とは重層的なコンテキストに支えられている。研究というナラティヴ実践における過渡的空間は、いかに生成されるのだろうか。それはまた、誰に向かって、いかなる意味をもつものなのだろうか。

莊島（2007b）は、あるひとまとまりのインタビューデータならびにトランスクリプトに対し、認識論およびアプローチの異なる2つの方法論を用いて、異なる知見を導き出すことを「知見の羅生門の生成」とよび、実践している。さらに、同一テーマについての研究を継続するなかで、例えば、コンテキストⅢ：自己物語論というアプローチに対して語り得ないものという視点を導入する、コンテキストⅣ：語り手を取り巻く複数の声（例えば、調査協力者の友人や家族を巻き込んでいく）を取り入れるほか、調査期間を伸ばして縦断的研究を行い、個の変容をみるなどして、ナラティヴが生成されるコンテキストの拡大化を図っている。ナラティヴ実践の1つの意義として、コンテキストの拡大化に伴う過渡的空間の拡大化が挙げられる。莊島（2007b）は、知見を羅生門的に生成することで明らかになるデータの多面的構造や知見のせめぎあいについては、1つの知見へ収束させる必要性は必ずしもなく、むしろ、異なる方法論によって照射されたデータから、双方にせめぎあう知見が得られたならば、そのせめぎあいがなぜ、いかに生じたのかをみることに重きをおいている。知見の「ずれ」が内包する意味合いを十分に読み取り、「ずれ」の内奥に迫っていくことで、一見すると「ずれ」ているもののなかに共通の構造が見出され、それは次の研究の新たなコンテキストとなる可能性を秘めているのである。個や事象の理解への到達は、研究者の目指すべき最終目標としては位置づけられるが、おそらく重要なのは個の理解へ到達しようとする研究者の格闘の痕跡や道筋を、重層的なコンテキスト上に残していくことなのではないだろうか。それは研究者と対象者が共に居合わせた土俵の記述であり、今後いかなる土俵が形成されうるのかを指し示す過程でもある。その過程こそが、過渡的空間としてのナラティ

ブ実践なのであり、双方が対話を維持し続けるというまさに臨床的な実践でもある。

過渡的空間という概念は、まだ理論化にとどまっており、研究実践までには至っていないのが現状である。今後は、過渡的空間という重層的なコンテクストを描き出し、新たなナラティブ・ベイスト・インクワイアリーを開拓、実践していきたい。

文献

- 浅野智彦. (2001). 自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ. 勁草書房.
- Atkinson, P., & Delamont, S. (2006). Rescuing narrative from qualitative research. *Narrative inquiry*, 16(1), 164-172.
- Atkinson, P. A., & Silverman, D. (1997). Kundera's immortality. *Qualitative inquiry*, 3, 30-57.
- Bakhtin, M. (1974). ドストエフスキイ論—創作方法の諸問題. (新谷敏三郎 訳). 第二版. 冬樹社.
- Bamberg, M. (2004). Narrative discourse and identities. In J.C. Meister, T. Kindt, W. Schernus., & M. Stein (Eds). *Narratology beyond literary criticism*. p.213-p.237. Berlin & New York: Walter de Gruyter.
- Butler, J. (1990). *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. NY and London: Routledge.
- Clandinin, D. J. (Ed). (2006). *Handbook of narrative inquiry: Mapping a methodology*. Sage.
- Cohler, B. J. (1982). 'Personal narratives and the life course'. *Life span development and behaviour*, 4, 205-238.
- Daly, K. (1992). The fit between qualitative research and characteristics of families. (pp.1-11). In Gilgun, J. F., & Handel, G. (Eds). *Qualitative methods in family research*. Sage.
- Denzin, N. K. (1995). The experimental text and the limits of visual understanding. *Educational theory*, 45(1), 7-18.
- Denzin, N. K. (1992). エピファニーの社会学—解釈的相互作用論の核心. (片桐雅隆他 訳). マグロウヒル出版.
- Elbaz-Luwisch, F. (2005). *Teacher's voices: Storytelling and possibility*. Greenwich, CT: Information Age.
- Eckert, P., & McConnell-ginet, S. (2003). *Language and gender*. NY: Cambridge University Press.
- Fishman, P. (1983). Interaction: The work women do. (pp.89-101). In Throne, B., Kramerae, C., & Henley, N. (Eds). *Language, gender, and society*. Rowley, MA: Newbury House.
- Frosh, S. (1999). What is outside discourse? *Psychoanalytic studies* 1, 4, 381-390.
- Gergen, K.J. (1994). Self-narration in social life. *Realities and Relationships*, p.185-p.209. Harvard University Express.
- Goffman, E. (1977). The arrangement between sexes. *Theory and society*, 4, 301-332.
- Gregg, G. S. (1991). *Self-representation: Life narrative studies in identity and ideology*. New York: Greenwood Press.
- Hermans, H., & Kempen, H. (2006). 対話的自己—デカルト／ジェームズ／ミードを越えて. (溝上 慎一・水間玲子・森岡正芳 訳). 新曜社.
- Holstein, J., & Gubrium, J. F. (1995). *The active interview*. Newbury Park, CA: Sage.
- Jaworski, A., & Nikolas, C. (Eds). (1997). *Language and masculinity*. Blackwell.
- Kellner, H. (1989). *Language and historical representation: Getting the story crooked*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Kleinman, A. (1988). *Illness narratives*. NY: Basic.
- 小林多寿子. (1997). 「ストーリーの社会学」の可能性—個人的な経験のナラティブからの出発. 同志

- 社社会学研究, 1, 31-37.
- Labov, W. (1982). Speech actions and reactions in personal narratives. In D. Tannen. (Ed). *Analyzing discourse: Text and talk*. (pp.219-247). Washington, DC: Georgetown University Press.
- Labov, W., & Waletzky, J. (1967). Narrative analysis: Oral versions of personal experience. In J. Helm. (Ed). *Essays on the verbal and visual arts*. (pp.12-44). Seattle: University of Washington Press.
- Langellier, K. M. (1989). Personal narratives: Perspectives on theory and research. *Text and performance quarterly*, 9, 243-276.
- 中村桃子. (2001). ことばとジェンダー. 勁草書房.
- May, R. (1975). Values, myths, and symbols. *American Journal of Psychiatry*, 132, 703-706.
- McAdams, D. P., & Ochberg, R. L. (Eds). (1988). *Psychobiography and life narratives*. A special issue of the *Journal of Personality*: 7. Durham, NC: Duke University Press.
- Mishler, E. G. (1995). Models of narrative analysis: A typology. *Journal of narrative and life history*, 5(2), 87-123.
- Mishler, E. G. (1992). Work, identity, and narrative: An artist-craftsman's story. In G. C. Rosenwald., & R. L. Ochberg. (Eds). *Storied lives: The cultural politics of self-understanding*. (pp.21-40). New Haven, CT: Yale University Press.
- Murray, M. (2003). Narrative psychology. In Smith, J. A. (Ed). *Qualitative psychology: A practical guide to research methods*. (pp.111-131). Newbury Park, CA: Sage.
- Personal Narrative Group. (1989). *Interpreting women's lives*. Indiana University Press.
- Plummer, K. (2001). *Documents of life 2: An invitation to a critical humanism*. Sage.
- Plummer, K. (1995). *Telling sexual stories: Power, change and social worlds*. London: Routledge.
- Polkinghorne, D. E. (1991). Narrative and self-concept. *Journal of narrative and life history*, 1, 135-153.
- Polkinghorne, D. E. (1988). *Narrative knowing and the human sciences*. Albany: State University of New York Press.
- Riessman, C. K. (1993). *Narrative analysis*. Newbury Park, CA: Sage.
- Riessman, C. K. (1991). Beyond reductionism: Narrative genres in divorce accounts. *Journal of narrative and life history*, 1(1), 41-68.
- Riessman, C. K. (1990). Strategic uses of narrative in the presentation of self and illness: A research note. *Social science and medicine*, 30(11), 1195-1200.
- 桜井 厚. (2002). インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方. せりか書房.
- Sarbin, T. R. (1986). *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*. London: Praeger.
- Schiff, B. (2006). The promise and challenge of an innovative narrative psychology. *Narrative inquiry*, 16(1), 19-27.
- Slater, S. H. (2003). What is the subject? *Narrative inquiry*, 13(2), 317-330.
- 荘島幸子. (印刷中). 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程—自らを「性同一性障害者」と語らなくなったAの事例の質的検討. *パーソナリティ研究*, 16(3).
- 荘島(湧井)幸子. (2007a). 自己物語論への《語り得ないもの》という視点導入の試み. *心理学評論*, 49(4), 655-667.
- 荘島(湧井)幸子. (2007b). ある性同一性障害者の自己構築プロセスの分析—同一トランスクリプトによる知見の羅生門的生成. *京都大学教育学研究科紀要*, 53, 206-219.
- Tokumanion, S., & Rennie, D. (Eds). (1992). *Psychotherapy process research, paradigmatic and narrative approach*. Newbury Park, CA: Sage.

White, H. (1989). The rhetoric of interpretation. In P. Hernadi. (Ed). The rhetoric of interpretation and the interpretation of rhetoric. (pp.1-22). Durham, NC: Duke University.
やまだようこ. (2007). 質的研究における対話的モデル構成法. 質的心理学研究, 6, 174-194.

注釈

注1) テクスト性という言葉は、我々自身がすでに言語やナラティブの形式にすでに浸かっているために、今日の社会における我々の生 (life) や経験が、様々なメディアを通して何らかのかたちで理論化され、分析され、カテゴライズされ、表象されてしまうことを意味する。

(日本学術振興会特別研究員 教育方法学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

Multilayered Contexts in which Narrative is Generated and Interpreted: Toward the Next Narrative Based Inquiry

SHOJIMA Sachiko

While narrative based inquiry became one of the main qualitative study and method across a wide variety of disciplines, narrative based inquiry had crowded the field of qualitative study. Also, a definition of "narrative" was not integrated yet. In this paper, drawing Mishler's (1995) model of narrative analysis, three categories of the narrative analysis model (1.Reference and temporal order, 2.Textual coherence and structure, 3. Narrative functions) were described. After examination, the three categories of narrative analysis model, multilayered contexts in which narratives were generated were refocused as an important perspective. Four contexts were extracted and explained, i.e., 1. an aspect of interaction of narratives, 2. an aspect of social action of narratives, and linkage between narrative and social historical contexts, 3. outside narratives and undertone narratives, 4. multi voices and life around the narrator's life. Finally, a connection between narrative and the self was discussed, introducing a concept of "transitional space" (Sclater, 2003) to narrative based inquiry.